

中学校国語科において情報活用の実践力（判断）を高める指導法に関する研究

広島市立古田中学校教諭 宇田 昭 史

研究主題設定の理由

これまで私は、総合的な学習の時間における地域学習、環境問題や国際理解などに係るテーマ学習、そして、担当教科の授業におけるコンピュータ利用を通して情報教育を行ってきた。その際、検索エンジンを用いた検索はできるが、最初に目にとまったWebサイトの情報を鵜呑みにしてその情報をそのまま使ってしまったたり、Webページや書籍のいくつかの情報を単純に切り貼りして信頼性を考えることもなく自分の情報としてまとめてしまったりする傾向が見られた。このことは、情報の収集はしても、その集めた情報一つ一つに対してじっくり考え、より適切なものを選んだり、必要な部分を取り出したりといった活動がなおざりにされている状況であり、情報活用の実践力が向上しているとは言い難い。

これまでの指導と学校現場における現状を振り返ると、情報教育に係る学習活動が、単にIT機器を利用した成果物の発表に重点を置いた指導になっていたりと、すべての教科で指導することとされている情報教育が、各教科の枠組み中でどのように指導したらよいのかが明確でないために、あまり意識して取り組まれていなかったりしたことが原因ではないかと考える。

そこで、生徒が、収集した情報の一つ一つをよく吟味し、自分なりの根拠をもって必要とする情報を判断する力を育てるには、各教科の指導の中でどのような指導の工夫をする必要があるのかを明らかにし、指導の考え方を例示するために、中学校国語科における指導事例の形で具体化したいと考えた。

研究の方法

情報教育に係る基礎的研究から課題を焦点化し、日常の教科指導の中で情報を判断する力を高めていくことについて、体系的に整理し、指導計画、指導事例の形で具体化する。

研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 各教科が担うべき情報教育の内容

『情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～』によると、情報教育の目標は、情報活用能力の育成を図ることであり、学校教育活動全体で育成していくべきであるとされている。また、情報活用能力は次の三つの観点に整理され、これらを相互に関連付けてバランスよく育てることが大切であると述べられている。

ア 情報活用の実践力（課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力）

イ 情報の科学的な理解（情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解）

ウ 情報社会に参画する態度（社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度）

このことを受けて、体系的な情報教育のイメージは図1のようにまとめられている。このイメージ図によると、各教科の指導において、主として「情報活用の実践力」を中心に情報活用能力を育成してい

く必要があることが示されている。

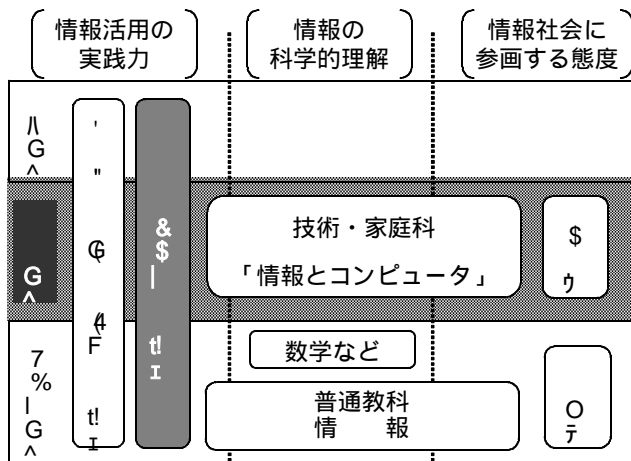


図1 情報教育の体系化のイメージ

(2) 情報活用の実践力の三つの能力

情報活用の実践力については、前述のような文章で示されているが、この内容は次の三つの能力に分けて考えることができる。

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用する能力

情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造する能力（一連の情報処理の流れ）

受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力

本研究において、課題としている生徒の実態を解決するためには、この情報処理の一連の流れの中で情報を判断する場面を中心として指導を行う必要がある。

(3) 情報処理の一連の流れの構成要素

文部科学省は、平成17年8月に示した『初等中等教育の情報教育に係る学習活動の具体的展開について』の中で、必要な情報の主体的な「収集・判断・表現・処理・創造」の情報処理の一連の流れについて、次のような指導項目を明らかにしている。

「収集」 幅広い、適切な収集を念頭に置いた情報手段選択のための知識と、実際に情報収集するための技能等

「判断」 収集した情報を「解釈」するための技能（グラフ化等）、「選択」するための知識（情報の信頼性、発信者の置かれ

た環境、意図、感情を理解した上での情報の解釈等）

「表現」 受け手、情報の特性等を念頭に置いた表現法選択のための知識や、選択した表現法により実際に表現を行うための技能等（自分が発信する情報の表現形態を受け手の立場に立って検証する技能等）

「処理」 電子情報化、音声化、表、グラフ化等の利点や、これらを行うための技能等

「創造」 既存情報の内容を組み合わせたり（下線部誤記訂正：筆者）、形態の違う既存情報を統合する利点、統合するための技能等及び、既存情報を基とした新たな情報を導出するための知識、技能等（自分が創造する情報の内容を受け手の立場に立って検証する技能等）

(4) 情報を判断する力

この「判断」の指導項目を基に、情報を判断する力を次の4項目に整理した。

グラフ化等により、収集した情報を解釈したり、選択したりするための知識・技能・態度。

情報の信頼性を考慮して解釈したり、選択したりする知識・技能・態度。

情報発信者の置かれた環境を理解して解釈したり、選択したりする知識・技能・態度。

情報発信者の意図や感情を理解して情報を解釈したり、選択したりする知識・技能・態度。

2 情報を判断する力の育成に係る評価規準及びその育成過程

(1) 情報を判断する力の育成に係る評価規準

この4項目を次の四つの観点、A 興味・関心・態度、B 知識・理解、C 解釈、D 根拠をもった判断（選択）に整理したものが次の情報の判断にかかわる評価規準（表1）である。これは、生徒に育成したい力の水準が、A、B、C、Dの各観点別にア イ ウと段階的に高まるよう設定している。各教科の学習指導計画を立案する際は、生徒の発達段階を考慮し、年間指導計画の中に指導内容を段階的に位置付けていくことが望ましいと考える。

表1 情報の判断にかかわる評価規準

	A 興味・関心・態度	B 知識・理解	C 解釈	D 判断(選択)
ア	(1) 自分の必要とする情報を、自分なりの根拠をもとに判断(選択)しようとしている。	(1) 見方によって、多面的な解釈ができることを理解している。	(1) 目的に応じて情報の取り出しを行う。	(1) 既存の知識に照らし、自分なりの根拠に基づいて判断している。
イ	(1) 様々な手だてを用いて情報を解釈しようとしている。 (2) 様々な手だてを用いて解釈した内容をもとに、情報を判断(選択)しようとしている。	(1) 情報を解釈するための手だてが分かる。 (2) 形式の違う情報を比較することが有効であることを理解している。 (3) 表・グラフ化、図式化が有効であることを理解している。	(1) 表・グラフまたは図式化された情報を読み取っている。 (2) データなどを表やグラフにまとめたり、記載された情報をもとに図式化したりしている。 (3) 情報を整理(要約)して解釈している。	(1) 既存の知識と目的に直結した情報の解釈を総合して判断している。 (2) 既存の知識と自分で収集した情報の解釈を総合して判断している。
ウ	(1) 既存の知識、解釈した情報、他者の意見を総合し、根拠を明確にして情報を判断(選択)しようとしている。	(1) 情報を正しく判断するには、複数の解釈を比較する必要があることを理解している。	(1) 情報発信者の意図や感情、状況(環境)を考えている。 (2) 情報の信憑性(信頼性)を考えている。	(1) 既存の知識、情報の解釈、他者の意見を総合して客観的に判断している。

(2) 情報を判断する力を高める過程

作成した評価規準と情報処理の流れを考慮して、情報を判断する力を高める学習過程を、次の図2の

ように構想した。図中のア～カは情報を判断するための一連の学習活動を示している。次に、その学習活動の各段階について述べる。

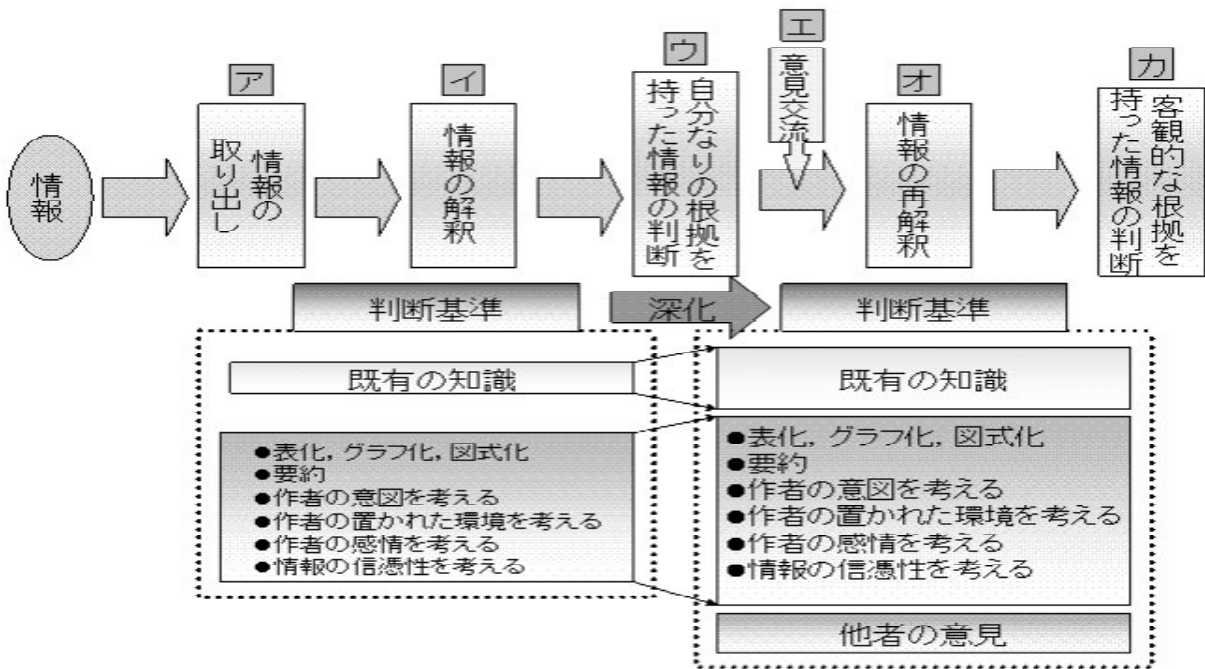


図2 情報を判断する力を高めるための学習活動

ア 情報の取り出し

情報を解釈して選択するという判断のために、ま

ずは情報そのものについての確につかむことが必要である。文章、絵や写真、図表、グラフなど様々な

情報が表している意味そのものを正確に理解する段階である。

イ 情報の解釈

言外の意味も含め、その情報の持つ意味について十分に吟味する段階である。情報を解釈する上での手がかりとなるものとして次のようなものが考えられる。

- ・ 既存の知識（これまでの生活や学習を通して獲得してきた知識や考え方、価値観など）
- ・ 表やグラフ化、図式化して表したもの（数値データを表やグラフにしたり、文章を図式化したりするなど、情報の持つ意味合いや包含している特徴を的確につかんだもの）
- ・ 内容を要約したもの（文章表現されたひとまとまりの情報を、そこに包含される意味合いに過不足がないよう的確にまとめたもの）
- ・ 情報発信者の置かれた環境を推察したり、調べたりしたもの。
- ・ 情報発信者の意図や感情を推察したり、調べたりしたもの。
- ・ 情報の信頼性を推察したもの。

ウ 自分なりの根拠をもった情報の判断

解釈した結果、自分の目的や課題に合う情報かどうか、信頼性の高い情報なのかどうかを考慮して、明確な根拠をもって自分としての判断を行う段階である。

この段階の判断は自分なりの判断であり、客観的な判断とは言えない。

エ 意見交流

ここでは、各自の判断結果を持ち寄り、他者との意見交流を行う。この活動を通して、自己の判断がより確かなものとして固まったり、物事の見方や考え方が広まったりする。このことでより客観性を伴った判断をすることができるようになる。

オ 情報の再解釈

エの活動を通して、再度、ウの自分の判断結果を振り返る段階である。この段階で十分に試行錯誤することで、既存の知識が充実し、判断する基準の深化を図ることができる。

カ 客観的な根拠をもった情報の判断

オの活動を通して再解釈した結果、取り出した情報が自分の目的や課題に合うかどうか、情報の必要な部分はどこかなどを、客観的な根拠をもって判断を行う段階である。

総合的な学習の時間等のまとまった時間確保ができる課題解決型の学習を実施する際には、情報を判断する力を育成するための一連の活動としてア～カの活動を明確に位置付け、指導していくことが望ましいが、各教科の指導においては、各教科で取り扱う学習活動を考慮し、ア～カの一連の活動をスモールステップに分割して学習活動の中に位置付け、年間を通して情報を判断する力が養われていくよう指導計画に盛り込む必要があると考える。

(3) 指導上の配慮事項

課題の明確化を図る

情報を判断する際には、何のためにその情報を用いるのかという意識の高揚を図ることが重要となる。そのため、各学習の導入場面では、生徒が学習課題を明確に意識化することができるよう、目標を黒板に明示するなどの工夫をする必要がある。

判断の根拠の明確化を図る

発問に対して応答する際、意識的に根拠を明確にして回答させ、論理的に考えることの大切さを意識化させるための工夫である。発問の際には、生徒の思考が深まるよう、具体物、図や写真などを提示したり、根拠の参考となるようなポイントを焦点化して示したりするなど、イメージや思考がふくらむよう配慮する。また、根拠を明確にして回答したものについては、できるだけ肯定的なコメントを返すよう心がける。根拠を述べて情報の判断をすることがある程度身についてきた段階で、根拠を記述する活動を取り入れ、書くことを通して論理的な説明ができるよう指導する。

意見交流を取り入れる

相互評価などの意見交流の場面をできるだけ取り入れることで根拠に客観性を持たせ、情報の判断に対する見方や考え方が広がるように配慮する。

教科書の挿絵や視覚資料等を活用する

補助資料的な扱いで掲載されている図表、写真、挿絵といった情報も、情報を解釈する技能を高める

有用な教材となる。本文との関連を図りつつ、意図的に図表、写真、挿絵から情報を読み取り、解釈する演習を行うとともに、なぜそのように読み取れるのか、図表そのものについての理解を深めさせる指導を行うことも必要である。

情報の信頼性を考慮させる

生徒は、与えられた情報や収集した情報について、その信頼性について意識して考慮する習慣がない。この技能や態度を養うには、意図的に情報の信頼性を疑う学習活動を位置付ける必要がある。学習活動例としては、同一の検索キーワードで収集した複数情報の内容を比較したり、情報の妥当性・信頼性などについて批判的な視点をもって検討・分析させるような学習活動（クリティカル・リーディング）を実施したりすることなどが考えられる。

3 情報を判断する力を高める指導計画例

(1) 中学校第1学年国語科における学習活動への情報を判断する力の育成の位置付け

情報の判断にかかわる評価規準や指導上の配慮事項をもとに、中学校第1学年国語科における学習活動の中で情報の判断にかかわる活動をどのように位置付けるかについて、表2のようにまとめた。まとめる際には、本市の現行教科書の1年間の指導計画を参考とし、2学期制への移行も考慮した。なお、情報の判断にかかわる学習活動[A]~[K]を位置付けた教材は、次のように特定の文種に偏らないよう配慮した。

- ・韻文（詩）（解説文を含む）
- ・文学的文章
- ・古文
- ・漢文（解説文を含む）
- ・説明的文章
- ・表現教材

表2 情報を判断する力を高める指導を位置付けた中学校第1学年国語科の指導計画例

< 1学期 >

教材	国語科の標準的な学習活動 (は指導目標，太字は右で取り上げた学習活動)	情報教育の視点と学習活動の位置付け (は留意点や指導者の意識等，【 】は評価規準)
2 レ チ レ 9 D 8	好きな詩を選び、内容や表現の特徴がよくわかるように朗読できる。 1 四つの詩を声に出して読み、それぞれの詩の作者である生き物になったつもりで、情景や心情を探る。 2 p 19「声を届ける」を読み、朗読を行う際の注意点や工夫点を理解する。 3 交流した四つの詩の特徴などをもとに気に入った作品を選び、登場する生き物の気持ちになって朗読する。	根拠を明確にして好きな詩を選び、様々な解釈があることが理解できる。 根拠を持った判断の必要性を知らせる。 他者の発表を聞くことで、解釈の要件（判断材料）を増やす。 学習活動[A] ・根拠を明確にして好きな詩を選ぶ。【A-ア(1)】 学習活動[B] ・様々な解釈があることを知る。【B-ア(1)】
モ ラ テ ナ	登場人物の行動から心情をとらえ、その変化をとらえることができる。 1 作品を通読する。 2 少年の気持ちが表されている部分に着目し、少年の心の動きをとらえる。(学習[1]) 3 少年の行動が書かれている部分を抜き出し、互いに発表する。その行動から少年の気持ちの変化をとらえる。(学習[2]) 4 少年にとって「にじ」が何を意味しているのか考え、ノートにメモし、それをもとに話し合う。 5 自分の気持ちが何かと出会うことで変わった経験を発表し合う。(学習[3])	心情が推察できる情報（箇所）を収集し、そこから心情を推察することができる。 気持ちや行動が分かる言葉が、判断の根拠（心情をとらえる裏付け）となることをおさえる。 学習活動[C] ・気持ちが分かる言葉を抜き出す。【C-ア(1)】 学習活動[D] ・行動が分かる言葉を抜き出す。【C-ア(1)】 ・心情を推察する。【D-ア(1)】

6 6 ニ C ノ レ ナ	<p>語句の意味を文脈の中で正確にとらえ、内容や特徴がよくわかるように朗読することができる。</p> <p>1 全文を通読し、心に残った表現や好きな言葉をノートに書き出す。</p> <p>2 p58・59「鹿踊りのはじまり」を読んで、作品や「鹿踊り」について理解を深め、「高原」の詩を読み方を工夫して朗読する。(学習①)</p> <p>「ホウ」という言葉に込められた宮沢賢治の気持ちを本文中から考える。</p> <p>筆者が述べているように、何度も繰り返しているいろいろな読み方を試してみる。</p> <p>3 1・2の学習活動から、それぞれの感想を読み合ったり話し合ったりして、言葉について交流を深める。(学習②)</p> <p>4 過去に読んだ宮沢賢治の作品を、互いに紹介し合う。</p>	<p>様々な情報（解説文、関係資料）を根拠にして読み方を判断することができる。</p> <p>判断に必要な情報を教師が与える。</p> <p>写真を、挿絵的な扱いでなく、判断の材料として活用させる。</p> <p>読み方を考える際、なぜそう考えたかの根拠を明確に書かせる。</p> <p>学習活動E</p> <p>教科書の「鹿踊り」に関する情報を読むこと。[A-イ(1)]</p> <p>視覚データ(写真)からイメージを広げる。[C-イ(1)]</p> <p>詩の読み方を決定する。[D-イ(1)]</p>
---------------------------------	--	---

< 2 学期 >

+ * k ケ	<p>展開に即して内容をとらえ、作品に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広くすることができる。</p> <p>1 全文を通読し、あらすじをとらえる。(学習①)</p> <p>2 冒頭文の原文を繰り返し音読する。</p> <p>・原文を口語訳と比べ読みして、理解する。</p> <p>3 古典の文章と現代の文章との違いをとらえる。</p> <p>4 場面や情景、人物の関係や心情などを読み味わう。</p> <p>5 物語に登場する人々の姿と、自分たちの生き方を比べ、感じたり考えたりしたことを話し合う。(学習③)</p>	<p>原文（古文）、口語訳、現代文、及び絵本等の「かくやひめ」を比較することで、展開を確実に理解することができる。</p> <p>学習活動E</p> <p>言葉のまとまりごとに原文と口語訳を関連付けさせ、原文の意味を理解する。[B-イ(1)]</p> <p>絵本との内容や言葉の相違点を見つける。[B-イ(2)]</p> <p>絵本の表現意図を考える。[C-ウ(1)]</p>
Y ! r ネ : * イ	<p>故事成語について調べ、現代に生きるものの見方や考え方を理解することができる。</p> <p>1 教材文を読み、故事成語について理解する。</p> <p>2 上段の原文を繰り返し声に出して読み、漢文独特の言い回しに慣れる。(学習①)</p> <p>・口語訳を参考に「矛盾」の由来を理解する。(学習②)</p> <p>3 学習③の故事成語について、語句ごとのグループに分かれ、意味や由来、用法・用例について調べ、発表し合う。</p>	<p>情報の信頼性を意識しながら、他の故事成語の由来を調べることができる。</p> <p>「確かな情報か」と投げかけ、判断の不十分さに気付かせる。</p> <p>インターネット上から複数のサイトを検索させる。</p> <p>情報の出所や出典を確認させることで、情報の信頼性を意識すべきことに気付かせる。</p> <p>学習活動G</p> <p>複数のサイトを比較し、情報の信頼性を確認する。[B-ウ(1)] [C-ウ(2)]</p> <p>自分の収集した情報を踏まえて判断する。[D-イ(2)]</p>
ツ ハ ! r	<p>事象などを表す多様な語句・語彙について関心をもち、その意味を正確にとらえることができる。</p> <p>1 全文を通読し、初めて知ったこと・考えたことをノートに書く。</p> <p>2 文中から必要な情報を選び出し、キーワードとなる語を簡潔にまとめる。(学習①)</p> <p>3 筆者の取り上げた事例と意見を分けてまとめる。</p> <p>4 文章の構成をとらえ筆者の考えをまとめる。(学習②)</p> <p>5 p131の図解「自然の中で循環する生分解性プラスチック」がもつ効果について考え、同様の手法で他の部分を図式化する。</p>	<p>キーワードに関する情報を集め、形式を整えて表現（要約、図解）することができる。</p> <p>キーワードのまとめ方として、単純な文の羅列にとどめず、図解にまで発展させる。</p> <p>学習活動H</p> <p>ひとまとまりの文章を要約する。[C-イ(3)]</p> <p>学習活動I (+)</p> <p>* 学習活動2でまとめた要約を図式化する。</p> <p>説明文における図解の効用について理解する。[B-イ(3)]</p> <p>教科書本文の情報からキーワードについて図式化する。[C-イ(2)]</p>

レ ポ ー ト の 編 纂 オ ペ レ ー シ ョ ン	自分の考えを表すために適切な材料を選び、伝えたい事実や事柄、自分の考えを明確にする。	ここでは、上記「未来をひらく微生物」の学習を生かして、微生物を利用した環境問題の解決策には、ほかにどのようなものがあるかを課題として設定し、レポートにまとめる活動とする。(『未来をひらく微生物』学習③)
	1 選んだ課題に沿って調べ方を工夫し、情報を集める。	レポートにまとめるための情報を取捨選択できる。
	2 集めた情報を整理し、事実と意見を区別してレポートにまとめる。 ----- 全体の構成を考えて下書きする。 p139「横書きのレポートの例」を参考に、調べたこと考えたことの書き分け、引用のしかたなどに注意してレポートにまとめる。	他者の発表を参考にして、自分のレポートを評価することができる。
	3 できたレポートを読み合い、意見を交換する。 ----- 友達どうして、互いの文章の良い点、工夫した点を話し合い、今後の自分の表現に生かす。	学習活動J 前教材の学習結果に新たな課題の一つを加えて、レポートにまとめる。[D-イ(2)]
4 「次へつなげよう」を参考に、調べたことをレポートにまとめる学習について振り返る。 -----	学習活動K レポートの発表会を通して相互に評価し、レポートの修正を行う。[A-ウ(1)][D-ウ(1)]	

(2) 国語科における、情報を判断する力を高める指導事例 A～Kについて、実際の国語科の授業場面を想定して、情報を判断する力を高める指導事例を具体的に示したものである。

表3は、表2中の情報の判断にかかわる学習活動

表3 情報を判断する力を高める指導事例

	国語科のねらいと主な学習活動	情報を判断する力を高める学習活動
学 習 活 動 A 1h	四つの詩の中から、好きな詩を選ぶことができる。 ・ 四つの詩を音読する。 ・ 情景や心情を探る。 ・ <u>好きな詩の一つを選ぶ。</u>	「野原はうたう」 自分なりの根拠を明確にして、好きな詩を選ぶことができる。[A-ア(1)] 1 四つの詩を読み、好きな詩を選んで発表する。 (1) 「みなさんへ」の範読を聞き、作者の思いについて自由に発表する。 (2) 「うちゅう・いるか」「あしたこそ」「おれはかまきり」「ひかる」の四つの詩を、気に入ったところに線を引きながら個々に音読する。 (3)気に入った詩の一つを選び、発表する。その際、自分自身にも判断した根拠が明確化されるよう、発表は「私は「 <u> </u> （詩の題名）」が好きです。なぜかという、～だからです。」などの話形に当てはめて発表する。 根拠を明確にした発表に対する意欲付けにつながるよう、発表に対しては肯定的にコメントする。 (4) 板書された他者の意見をノートに記録する。
学 習 活 動 B 1h	内容や特徴がよく表れるよう工夫して朗読することができる。 ・ 内容や特徴を理解する。 ・ <u>朗読する詩を再度選ぶ。</u> ・ 朗読の工夫点を考える。 ・ 朗読し合う。	「野原はうたう」 詩に対して、様々な感じ方があることを理解できる。[B-ア(1)] 3 1(学習活動 A)で学習した <u>他者の意見や詩のおもしろさ、特徴などをもとにして、気に入った作品を再度選ぶ。</u> (1) ノートを元に、新たに気に入った箇所に線を引く。 (2)気に入った詩を再度選ぶなおし、選んだ根拠も併せて発表する。
学 習 活 動 C 1h	心情を表す表現から作品の理解を深めることができる。 ・ <u>気持ちが表れている語をもとに、心を動きをとらえる。</u>	「にじの見える橋」 心情を表す表現を抜き出すことができる。[C-ア(1)] 2 少年の気持ちが表されている部分に着目し、少年の心の動きをとらえる。 (1) p25 学習1に挙げてある六つの部分それぞれについて、その中で特に少年の気持ちが表れている語句を抜き出し、どんな気持ちが読み取れるか、 <u>そう考えられる根拠もあわせて発表する。</u> (2) (1)の学習をもとに、少年の心の動きについて、発表する。 (3) 発表された内容をワークシートに書き入れる。

<p>学習活動 D 1h</p>	<p>人物の行動から、気持ちの変化をとらえることができる。 ・ <u>行動を表す部分をもとに、気持ちの変化をとらえる。</u></p>	<p>「にじの見える橋」 人物の行動を根拠として、気持ちの変化をとらえることができる。【C-ア(1)】【D-ア(1)】 3 少年の行動が書かれている部分を抜き出し、その行動から少年の気持ちの変化をとらえる。(p25 学習2) (1) 少年の行動が書かれている部分を抜き出して発表する。その際、抜き出した根拠を明確にさせるために、抜き出した部分について「何をしているか」「どんなふうになっているか」を端的に述べる。 (2) 発表内容をワークシートに記入する。 心情の変化をつかみやすいよう、時系列に沿って記入できるワークシートを工夫する。 (3) 少年の行動から、そのときの<u>心情をとらえ、なぜ、そう考えられるかの根拠を明確に発表する。</u> (4) にじを見る前と後の心情変化について考え、発表する。</p>
<p>学習活動 E 2h</p>	<p>内容や特徴が分かるよう朗読するための工夫を考えることができる。 ・ <u>解説文を読み、作品や「鹿踊り」について理解を深める。</u> ・ <u>作品の朗読のしかたを考える。</u> ・ 内容や特徴がよく分かるように朗読する。</p>	<p>「光と風からもらった贈り物」 写真(非連続型テキスト)を読むことを意識化し、文章(連続型テキスト)と合わせてそこから読み取れる情報を根拠にして、朗読の工夫を考えることができる。【A-イ(1)】【C-イ(1)】【D-イ(1)】 2 P58, 59「鹿踊りのはじまり」を読んで、作品や「鹿踊り」について理解を深め、「高原」の詩を、読み方を工夫して朗読する。 (1) 朗読に向けて「鹿踊り」をイメージするという課題を意識して、「鹿踊りのはじまり」を黙読する。 (2) 「鹿踊り」について分かる言葉に線を引き、その言葉からイメージをふくらませる。 (3) P58, 59の岩手山と花巻の鹿踊りの写真から「鹿踊り」に関して想像できることをグループで話し合い、イメージをふくらませる。 (4) 詩中の「ハウ」に込められた作者の気持ちを中心に、詩の内容をとらえる。 (5) 朗読のしかたを考え、ワークシートに書く。 根拠をもった判断であることを明確にするために、詩の読み方を決めた理由を記入する欄を設ける。 (6) 根拠をもって朗読の工夫点を決め、本文の記述にある「ゆっくりと、楽しく愉快地に、多少おどけて」なども含めて様々な読み方を試し、グループ内で聞き合って感想を交流しながら、読み方を深める。</p>
<p>学習活動 F 1h</p>	<p>展開に即して、内容をとらえることができる。 ・ 全文を通読する。 ・ <u>現代文と古文を対比させながら、内容をとらえる。</u></p>	<p>「蓬萊の玉の枝」 原文を理解するために、口語訳や絵本を比較することで、あらすじや意味の把握が確実になることを理解できる。【B-イ(1)】【B-イ(2)】 絵本の作者の表現意図を考えることができる。【C-ウ(1)】 1 全文を通読し、あらすじをとらえる。 (1) 原文の一つめのまとまり(p113 L12～p114 L6)を音読する。 (2) 口語訳の一つめのまとまりを黙読する。 (3) 原文を印刷したワークシートに口語訳を書き入れる。 ワークシートは、該当する部分を抽出しやすいよう、上半分に、原文を句読点で切って1行にしたものを配し、下半分に、そこに該当する口語訳を記入できるようにしたものにする。 (4) 絵本「かぐやひめ」の全文を読み、教科書との相違点(人物の設定や言動、話の流れなど)をノートに書く。 (5) 絵本「かぐやひめ」に原文の内容と異なる部分があるのはなぜかを考え、発表する。 絵本の挿絵と教科書の絵巻物の写真とを見比べてみることも促す。</p>
<p>学習活動 G 1h</p>	<p>故事成語について理解し、語彙を増やすことができる。 ・ <u>インターネットで故事成語を調べる。</u> ・ <u>情報の信頼性について考え、複数のサイトの情報を検索する。</u> ・ <u>調べた結果を発表し合う。</u></p>	<p>「今に生きる言葉」 故事成語について、複数のサイトの情報を比較し、調べた内容の信頼性を高めることができる。【B-ウ(1)】【C-ウ(2)】【D-イ(2)】 3 p124 学習3に挙げられている故事成語(「推敲」「五十歩百歩」「背水の陣」「蛇足」)について、語ごとのグループに分かれ、意味・由来・用法・用例等を調べ、発表し合う。 (1) インターネットで担当する語について調べ、グループ内で確認しながらワークシートに記入する。 (2) 情報の信頼性について考える。 【発問】 「インターネットは便利ですね。ところで、みんなが調べた情報は本当に正しいのですか。」</p>

		<p>「正しいかどうかを判断するには、どうすればいいでしょうか。」</p> <p>(3) <u>最初に調べた以外のサイトを調べ、内容を比較し、必要に応じてワークシートを修正する。</u></p> <p>(4) 調べた結果を発表し合う。</p>		
学習活動 H 1h	<p>文章を要約することができる。</p> <p>・ <u>キーワードに関する説明部分を要約する。</u></p>	<p>「未来をひらく微生物」</p> <p>キーワードを説明した部分を要約することができる。【C-イ(3)】</p> <p>2 文中から必要な情報を選び出し、キーワードを説明した部分を簡潔にまとめる。</p> <p>(1) 本文中のp135 学習1に挙げられているキーワード「微生物」に線を引き、定義部分、補足説明の部分、例示の部分について発表し、ワークシートに書く。</p> <p>要約の手法を理解しやすいよう、ワークシートは、「定義」「補足説明」「例示」を分けて書ける欄を設け、体言止め、箇条書きの形でまとめるよう助言する。</p> <p>(2) 以下、「発酵」「生分解性プラスチック」についても同様に行う。</p>		
学習活動 I 1h	<p>説明的文章における図の有効性について理解することができる。</p> <p>・ <u>図解と本文との対応を確かめながら図解の持つ意味を読み取る。</u></p> <p>・ <u>文章を図式化する。</u></p>	<p>「未来をひらく微生物」</p> <p>要約した部分や数値情報を図式化することができる。【B-イ(3)】【C-イ(2)】</p> <p>5 p131の図解「自然の中で循環する生分解性プラスチック」がもつ効果について考え、2で扱ったキーワードにかかわる要約を図式化する。</p> <p>(1) 第二のまとまり(p130 L1～p133 L16)の前半から、プラスチック製品の利点と欠点を明確にする。</p> <p>(2) プラスチックの問題が深刻なものであることを理解しやすくするために、文中の数値情報(プラスチックの生産量、使用済みとなった量、再利用された量の三つの数量関係)を棒グラフを模した長方形で図示し、「残り」(焼却・埋め立てされたプラスチック500万トン)が、生産量の3分の1に上ることをつかむ。</p> <p>【板書例】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>2000年に作られた プラスチック 1500万トン</p> <table style="margin: auto; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">再利用 500万トン</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">焼く・埋める 500万トン</td> </tr> </table> <p>使用済みの プラスチック 1000万トン</p> </div> <p>(3) プラスチック製品の欠点を補うプラスチック(生分解性プラスチック)について理解するために、p131「自然の中で循環する生分解性プラスチック」の図を本文に照らし、<u>分析し、ワークシートに書く。</u></p> <p>分析の焦点化を支援するために、ワークシートには次のような分析の観点を示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 矢印の形や色、向きなどが表す意味 ・ 太陽や工場、植物などの単純化されたイラストの効果 ・ 「でんぷん」「製品」などのことばに施された飾りの形や色に見られる統一性と区別 <p>(4) 2(学習活動H)で扱ったキーワードの要約を、図式化する。</p>	再利用 500万トン	焼く・埋める 500万トン
再利用 500万トン	焼く・埋める 500万トン			
学習活動 J 3h	<p>伝える事柄や考えを明確にし、分かりやすい文章を書く。</p> <p>・ <u>課題に沿って情報を集める。</u></p> <p>・ <u>集めた情報を取捨選択する。</u></p> <p>・ <u>レポートを作成する。</u></p>	<p>「調べたことを正確に伝えよう」</p> <p>前教材「未来をひらく微生物」の学習を生かして、微生物を利用した環境問題の解決策には、ほかにどのようなものがあるか、レポートにまとめることができる。【D-イ(2)】</p> <p>2 集めた情報を整理し、事実と意見を区別してレポートにまとめる。</p> <p>(1) 集めた情報を、<u>内容ごとに整理し、レポート作成に必要なものを選択する。</u></p> <p>次学習の振り返りのために、レポート作成に必要なでない情報も手元に残しておくよう指示する。</p> <p>(2) 全体の構成を考えて小見出しを付け、目次ページを作る。</p> <p>(3) 小見出しを見直ししながら下書きする。</p> <p>(4) 図表等を効果的に配置しながら清書する。</p>		
学習活動 K 1h	<p>読み返しや他者との読み合いを通して、より分かりやすい文章に高める。</p> <p>・ <u>レポートを読み合い、意見交換を行う。</u></p> <p>・ <u>自他の評価をもとに、レ</u></p>	<p>「調べたことを正確に伝えよう」</p> <p>読み返しや他者との読み合いを通して、より分かりやすい文章に高める。【A-ウ(1)】【D-ウ(1)】</p> <p>3 できたレポートを読み合い、意見を交換する。</p> <p>4 「次へつなげよう」を参考に、調べたことをレポートにまとめる学習について振り返る。</p> <p>(1) グループ内で、レポートを回し読みした後、個々のレポートについて<u>意見交換を行う。</u></p>		

<p>ポートを修正する。</p>	<p>振り返りの焦点化を支援するために、意見交流や評価の観点を明確に示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 情報収集で苦労した点、気をつけた点はどこか。 ・ 事実と意見(感想)との書き分けができているか。 ・ 全体の流れや小見出しは妥当か。 ・ 図表などを適切に活用できたか。 <p>(2) 自分のレポートに関する意見や評価、及び他者のレポートに対する意見や評価で参考になったことを、ワークシートに記入する。</p> <p>(3) 自分のレポートに対する他者の意見と、他者のレポートで参考になったことを取り入れながら、収集した情報についてもう一度見直し、レポートを修正する。</p>
------------------	--

成果と課題

1 成果

情報を活用すべき場面に見る生徒の課題にかかわって、どのような力が不足しているのか考察を進め、明確化することができた。

各教科等で情報教育を推進していくとはどうすることなのか、という大きなテーマに対し、大がかりな単元を新たに設定したり、投げ入れ的な題材を新たに開発したりといったことではなく、日常の標準的な学習計画の中に、情報教育の指導(情報を判断する力を高める指導)の視点を見出し、一つの考え方をもとに、体系的に整理していくことができた。

情報を判断する力を知識、技能、態度の面から項目化し、それをもとに四つの観点から成る評価規準として整理することができた。日常の教科指導において、情報を判断する力を高める学習活動を計画する際の一つの参考になると考える。

情報を判断する力を高めていく指導について、発問や板書、学習活動の工夫といった、具体的な手だてや配慮事項として、明らかにすることができた。

2 課題

教科における、情報を判断する力を高める指導のモデルを、中学校第1学年の国語科について作成したが、今後の授業実践を通して、その有効性を検証していく必要がある。

中学校においては、技術・家庭科(技術分野)が情報教育の核になる教科として位置づけられている。今後、各教科は、技術・家庭科(技術分野)との連携を十分に図り、情報教育全体の体系化も

視野に入れた計画を、各学校で構築していく必要がある。

なお、この研究において中心的に検討してきた情報活用の実践力、殊に情報を判断する力は、現在の話題の一つである「PISA型「読解力」」との関わりが非常に深いと思われる。読む対象に、視覚情報である「非連続型テキスト」までを含み、「読解」を、情報の正確な取り出しにとどめるのではなく、得た情報を様々な手段をもって解釈し、それを活用して自分の意見や考えを述べるころまで広げて考える「PISA型「読解力」」は、まさに双方向コミュニケーションの総合的な能力としての位置づけであり、情報活用に直結した力である。この「読解力」の育成もまた、学校教育全体で推進していくべきものとされていることもあり、今後、「読解力」の育成と情報教育の推進とを学習活動構築の観点から有機的に結びつけて、具体的な取り組みの開発を行っていきたいと考えている。

参考文献

- 中村一夫『高等学校新学習指導要領の解説 情報(普通教科)』学事出版 2000
- 文部科学省『情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引き」～』2002
- 文部科学省『初等中等教育の情報教育に係る学習活動の具体的展開について』2006
- 文部科学省『読解力向上に関する指導資料 - PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向 -』2005
- 『中学校国語 学習指導書1』光村図書 2007